

●コレクション・データ

時代 弥生時代 中期
 調査 唐古・鍵遺跡 第3・65次調査
 発見年 1982・1997年
 大きさ(下の鑄型)
 高さ9.8cm・幅8.1cm・厚さ5.8cm
 展示位置 第2室「青銅器をつくる」



唐古・鍵考古学ミュージアム

KARAKO-KAGI ARCHAEOLOGICAL MUSEUM

ミュージアムコレクション 23

重弧文様をもつ袈
 袈襴文銅鐸鑄型

弥生時代最大の謎の一つに銅鐸どうたくがあります。西日本を中心に300個前後の銅鐸が出土していますが、その製作地が判明している遺跡は、ごく僅かです。なかでも唐古・鍵遺跡は、大量に銅鐸を製作していた遺跡として有名です。

今回紹介する銅鐸鑄型いがたは、凝灰岩質砂岩製で2つのかけらが残っていました。この砂岩は、奈良盆地東部に分布する藤原層群中で採集できる石で、天理市豊田山付近の石材が最も類似していると推定されています。砂岩は、やや黄色味を帯びた灰白色を呈し比較的軟らかいものです。鑄型に適している石材は少なく、弥生の鑄物いもの工人も苦労して見つけ出したと考えられます。さて、この2つの鑄型片は、いずれも8センチほどの小片で砥石といしに転用されていました。鑄型が壊れた後、砥石として使ったのでしようが、黒く変色した鑄型面がわずかに残っています。

この鑄型片を詳細に検討したところ、高さ40〜50センチ四区袈襴けさ文銅鐸どうたく(斜格文を充填した縦横の帯によって4つの区画を作った文様)で、四区の内部に上下の重弧文じゅうこもん(円弧を重ねた文様)を配する特異な銅鐸であることが判明しました。今のところ、この鑄型で鑄造された銅鐸は見つかっていません。

同じ石の鑄型で製作された銅鐸は、現在、5〜6個確認されていることから、唐古・鍵遺跡のこの鑄型でも5個程度の銅鐸が製作されたと考えられます。いずれ唐古・鍵産の銅鐸も日本のどこかで発見されることでしょう。

唐古・鍵産の銅鐸の輝きと音色をどこの地域の人が見て聞き、何を感じていたのか、想像は膨らみます。このような小さな石製鑄型ですが、唐古・鍵遺跡との関係を考える上では最も重要な遺物の一つです。

唐古・鍵考古学
 ミュージアム
 【 ☎ 34・7100 】

開館時間 午前9時〜午後5時(月曜は休館)
 観覧料(カッコ内は20人以上の団体料金/15歳以下は無料)
 ▼大人 200円(150円)
 ▼高校生・大学生 100円(50円)

ミュージアム上面図と展示位置

